

大学院「臨床教育学総論」における特別講義の試み

－教育目的の再考に向けて－

Report on Special Lessons approached from ‘Aims of education’
in ‘Introduction to Clinical Education’ in Master’s Program

山崎洋子*

YAMASAKI, Yoko*

Abstract

In this paper I shall report on the special lessons in the ‘Introduction to Clinical Education’, which is a required subject for postgraduate students on the master’s course who belong in Education Major and Clinical Psychology Major in the Graduate School of Literature, and Clinical Education Major in the Graduate School of Clinical Education. The academic field of ‘Clinical Education’ that we addressed began originally with some educational, psychological and social problems such as school refusal and bullying and violence etc in Japan and other countries. Mr. Gary Foskett, as a cooperative lecturer, and I gave two special lessons for them. The contents were ‘Aims of Education’ based on his philosophy of education of 3DI based on intellectual/instinctual, emotional/social, and physical/spiritual(metaphysical) intelligences, including showing some cooperative or topic work by children, as the learning methods of progressive education, by using a DVD of Eveline Lowe Primary School where he as a headteacher worked for twenty-one years. Our goal in the lessons was to promote reflective thinking and attitudes regarding our views on the aims of education. The results we identified from the final assessments using the students’ comments were that many of their ideas or thoughts about education which had previously occupied their minds mostly changed from stereotyped ideas into creative ones. They were, therefore, actually inspired to think about educational reform.

1. はじめに－「臨床教育学総論」の特色－

ここで取り上げる授業は平成20年度よりスタートした大学院の新設科目、「臨床教育学総論」（前期2単位の必須）である。この科目の創設は、教育学、心理学、福祉学の統合を目指した、本学固有の臨床教育学の方向性をより先鋭化することを一つの目的としている¹。換言すれば、この科目は隣接諸科学を考慮した多様な学習機会の提供と、相互交流の途を開こうとしたのである。対象となる受講生は、文学研究科の教育学専攻と臨床心理学専攻、そして臨床教育学研究科臨床教育学専攻の3専攻の院生である。彼らは、問題関心や予備知識のみならず、経歴や職業、年齢の点でも多様である。それゆえ、一元的に受講生の興味・関心を斟酌し習熟程度を確認しながら授業を進める、という配慮も容易ではない。とはいえ、大学院の授業であるため、当然のことながら、専門的かつ高度な講義内容が求められる。つまり、本授業は、一般の人々を対象にした一回限りの講演とも、年齢層と講習内容が法的に規定された免許状更新

講習とも異なった特殊性を有しているのである。こうした状況ゆえに、授業構想上の配慮やある種のジレンマもやや趣が異なったものとして生じてくることが予め想像された。

また、本授業は、夜間開講と昼間開講の教員が交代で隔年ごとに担当するという方途を取っており、教育学、心理学、福祉学の分野から選ばれた各1名の教員が等分コマ数を担当するオムニバス授業となっている。つまり、臨床教育学に対して3つの学問からアプローチし、そのことを通して臨床教育学を総論的に考察することを目指しているのである²。

さらに特異なことは、本授業の開講責任が社会人院生を多く擁する臨床教育学研究科にあることであり、そのため、本授業では開講開始時刻への配慮が優先されることになる。そのことは、土曜日の午後2時から3時20分までの1回80分間の授業、というルールに現れている。他の授業よりも10分間短いという事情は、講義内容の習熟という点で、受講生の理解に何らかの影響を及ぼすことも想定される。

* 武庫川女子大学 (Mukogawa Women’s University)

だが、実際には、「おわりに」で述べるように、そうした懸念は払拭される結果となった。とはいえ、本科目の性格や特色を考慮に入れた上で、教授上の工夫や配慮が求められることは言うまでもない。

本授業ではこのような事情に向き合うため、また授業構想上の配慮の必要性やジレンマに対峙するべく、一般の形式の授業とは異なる講義を構想し実施した。それが本稿で取り上げる特別講義である。

この特別講義は、ロンドンの Eveline Lowe Primary School(1966-)³の第三代校長(1986-2007)として 21 年間教育実践に果敢に携わった Gary Foskett 氏を講義協力者として招聘し、共に講義を試みた授業である。氏が校長を務めた Eveline Lowe Primary School は、進歩主義教育の理念を具現化する形で、ロンドン市と中央政府の共同プロジェクトによって創設された、イギリスの学校教育史上著名な公立初等学校である。また、この学校は、イギリス教育史においてしばしば登場するプラウデン報告書 (Plowden Report, 1966/7) にも紹介されており、オープン・プラン型の学校建築として歴史的にも国際的にも名高い。それゆえ、進歩主義教育思想を具現化したモデル校と見なされ、当時は多くの参観者を受け入れてきた。筆者は当該校を自らのイギリス教育思想史研究の延長線上に位置づけ、2002 年より学校理事会、校長、副校長、教頭らの協力を得て同校の教育実践を研究してきた⁴。その関係で、Foskett 氏は、2007 年度より、筆者の科学研究費研究プロジェクトの外国人研究協力者 4 名のうちの 1 人として、来日していた⁵。実は、氏は退職後も、近年のイギリスの教育改革の方向性に疑念を呈している多くの教師を束ねている。そのため、教育目的の再考において貴重な講演者であると判断し、特別講義の任を依頼したわけである。

そこで本稿では、「臨床教育学総論」に対する筆者の意図、そして、特別講義の試みとその成果を報告する。内容構成としては、まず授業の全体像を説明し、次に特別講義の目的と講義スタイルについて叙述する。そして、最後に受講生のコメントを基礎データとし、彼らが特別講義からどのような気づきを得たかに関して、受講者の印象や教育への思いとともに取り上げ、若干の考察を加える。

2. 「教育目的」の問い直し—本授業の特徴と目的—

前述したように、本授業は臨床教育学研究科が責任開講機関となっているが、昼間部に属している教育学専攻と臨床心理学専攻の院生も履修することが義務づけられている。つまり、単位の修得は大学院修了上の必須要件である。この授業に教育学、心理学、福祉学からアプローチするわけであるが、隣接諸科学であるとはいえ、各学問の基礎知識を受講生が有しているとは限らない。

教育学を例に言うならば、教育学は教員免許取得のための学問であると理解している者すらおり、教育学の研究対

象、研究方法を知っている者は少ない。もちろん、教育学から臨床教育学というジャンルが出現した理由や、その研究方法上の課題を知っている者も稀有である。しかし、臨床教育学の出自が日本の教育学にあることは軽視し難い。それは教育学の学的対応あるいは選択肢の一つとして出現してきたジャンルであり、その背景には近代の教育が探究してきた教育目的、教育方法、教育内容の問題・限界状況がある。というのも、日本は近代化に向けて欧米の教育思想を受容し、義務、無償、世俗を原則とする公教育制度の成立・発展に心血を注いできたわけであるが、その制度自体が、今や子どもをめぐる問題状況を生む原因となっている、という指摘もあるからである。それは近代教育のパラドックスと称されている。

それゆえ、臨床教育学の出自の理解は本授業では不可欠である。つまり、教育の原理を理解しないままでは、臨床教育学総論の入り口に達することはできず、それゆえ、本授業では「教育とは何か、学校教育は何を目的にしているのか」といった問いへの接近が前提かつ不可避となる。

そこで授業構想上、念頭においたのは、受講生一人ひとりに暗黙にある「教育目的」を問い直すというモチーフである。これが、教育学の観点からアプローチした筆者の授業を貫くモチーフとなっている。すなわち、本授業の要は、「教育目的の問い直し、教育目的の再考」である。もちろん、その際には、臨床教育学というジャンルの出現を教育思想史的に探ろうとする姿勢が不可欠である。それは、先にも少し触れたように、臨床教育や臨床心理といった領域の出現の一つの理由に、教育、学校、子どもをめぐる混迷の実態が厳然とあるからである。しかも、教育理論がどのような思想をもって展開されてきたかの理解を欠いた状態では、その対処法や処方箋は浅薄なものに陥ってしまうだけでなく、さらなる混乱を招来する。それゆえ、今日の問題状況の理解のためには、臨床教育学が出現した背景や理由の根底にある教育観を問い直す必要があり、それをしない限り、対処療法的な臨床心理や臨床教育の実践を繰り返すだけに終始する状況が蔓延することになる。こうした危惧を覚えるのは、臨床教育学という学問のディシプリンが未だ不明確であることとも関わっている。というのも、実践優先の臨床教育学は、学的研究に際して、畢竟、親学問が有しているディシプリンに依存せざるを得ない現状があるからである。

以上の様々な状況を勘案しつつ、本授業は、①研究者による教育学の知見の概説と教育学の問題状況への提示、②教育問題に取り組んでいる教育実践者の理論、という二つの内容で構成した。そして、②を実現するために、共同講義というスタイルを取ったわけである。前期の 4 月 11 日から 5 月 9 日までの担当期間の全持ち時間数は、アセスメントを含んで 1 回 80 分間の計 5 回である。受講者数は、教育学専攻 4 名、臨床心理学専攻 23 名、臨床教育学専攻 11 名

の計 38 名であった。この授業の全体をまとめると、次頁の表 1 のようになる。一瞥してわかるように、授業全体に通底する問題意識は、近代の教育観の問い直しである。ただし、本授業では、こうした問いを前面に掲げるのではなく、トピックを設定し、マクロとミクロの視点からアプローチするように心がけた。

第一講では、俯瞰的かつ教育思想史的に教育観の変遷を概説し、そのことによって、まず教育学の基礎知識を提供した。具体的には、教育という言葉の出現、19 世紀初めのヘルバルトの教育思想、公教育制度成立期の教育目的・教育方法・教育内容、20 世紀の新教育運動が主張した「子どもの自由」と「教育の自由」、20 世紀半ば以降に出現してきた多様な教育問題について講じた。そして、その上で、「教育とは何か、教育の目的とは何か」という問いに着地していった。これが次の特別講義で掲げた問いに繋がっていくことになる。

3. 特別講義の目的と実際

「教育とは何か、教育の目的とは何か」という問い。これは根源的な問いであるが、その切り口はややもすれば多様かつ広くなりがちである。それゆえ、具体的な実践を提示しなければ、論点や思考が拡散する傾向を招来する。そこで特別講義に際しては、予め多めの課題を与えることとした。教室は緊張感に溢れ、事前学習をしなければ講義が理解できないのではないか、という不安、そしてそれを何とか乗り越えようとする気迫すら漂っていた。それは、M2 生 2 名を除く 36 名が新入学生であることも関わっている。いうまでもなく、4 月年度初めの新入生には緊張感とともに期待感が漲り、これが功を奏して、クラス全体の意欲を喚起するからである。

さて、特別講義のトピックに関しては、大きく「教育の目的と人間の発達について考える」とした。その意図は、タイトルが示しているように、教育目的や人間の発達に関する知識を獲得することではなく、問題意識の生成と思考の深化にある。換言すれば、それは受講者の教育観に揺さぶりをかけることにある。また、このことは、日本で教育を受けた者に一般に染みついている、いわゆる「注入主義的教育」「知識偏重の教育」を教育と見なす姿勢や態度を問い直す、という目的を内在している。さらにこのことは、筆者の研究上のスタンスにも関わっているが、それだけでなく、「現代の学校教育に対する問題解決的な態度」形成の重視にある。これは受講者の問題意識の深化にも繋がることであるが、加えて次世代を担う人々への教育の可能性への筆者の期待を内包している。

ただ、その際に検討を要するのは、どのような立場の人間がそのことを提示するかが受講者の意識を左右する、ということである。というのも、教育思想史研究者がいくら声高にラディカルな見解を述べたとしても、説得力は弱い

と推察されるからである。言い換えれば、高等教育機関に属しながら実践現場の改革を主張する態度は、たとえ高等教育における研究が批判的思考や改革志向の態度に基づいていたとしても、リアリティや生活感に欠けるからである。そこでしばしば採用されるのが、教育学研究者と教育実践者の協同研究である。ただ、さらに考慮に入れたのは、「実践の学」でもある教育学において、批判的精神や問いかけが有効性を発揮するのは、研究者を優位とする共同関係ではなく、対等関係の中で複眼的な見方が成立するときである、という筆者の経験則である。この点を考慮するならば、講義の対象がたとえ現職教師であったとしても、リアリティに基礎づけられたラディカルな考えは、聞き手の内面に真剣さと呼び起こすのではないか。これが筆者の意味するところの共同講義である。

本授業ではこのような見地から、イギリスの教育現場で指導性を発揮してきた教育実践家の協力を得ることにしたわけである。周知のように、イギリスの学校現場は、長い年月をかけて進歩的な教育思想のエートスを培ってきた歴史を持つ。幼児学校や初等学校では、教師が子どものスキルや知識の習得レベルを観察し、教師が専門性を発揮して自らの手でカリキュラムを作ってきた、という伝統がある。このような教師の専門性の意味内容を伝えるならば、教育に対する先入観が揺るがされるのではないか、このような考えが想定された。そこで、ロンドンの初等学校での校長職を 21 年間も務めた教育実践者の生の声を異文化の雰囲気とともに伝えてほしい、と氏に依頼した。その上で、氏の考える教育実践論に対し、日本の研究者が日本の教育の文脈で考察を加え、再考の機会を提供するならば、受講生の問題意識はさらに深まるに違いない⁶、ということも付け加えた。またさらに念頭に置いたのは、教育に対する考え方の「違い・差異性」の認識が教育観の「問い直し」へとステップを踏み出す構えや勇気を生成するのではないか、という予測であった。これらのことが了解され、共同講義の実施が決定したわけである。

その後、さらに検討を要したのが、講義スタイルをどのようにするかであった。教育学に関する知識がほとんどない受講生も存在すること、それに加えて英語を聴き取る能力が弱いこと、これらのことへの対応が不可欠であった。その一つが、事前学習の重視である。表 1 内に記した配付資料①②は、筆者と Foskett 氏による同一内容の共著論文であり、日本語と英語の両方でそれぞれ刊行されたものである。これらの資料は、事前に日本語で講義の背景を理解し、それに対応する英語表現がどのようになっているかを理解するためのものである。加えて、校長としての教育観を述べた英語版論文④⑤と教育実践を対象化した日本語論文⑥も事前に配布し、具体的なイメージが得られるようにした。授業の形式は、第一回（第二講）、第二回（第三講）のいずれにおいても二カ国語による共同講義のスタイルを採用

した。第一回の特別講義では、まず山崎がイギリスの進歩主義教育の全体像と Eveline Lowe Primary School の位置づけを日本語で解説した。次に、Foskett 氏が自らの経験に基づいて展開してきた教育目的についての考えを、氏の捉える人間観と教育観とともに展開した。その際には簡単な英語版トーキング・ペーパーを配布し、それを見ながら英語で講義し、それを筆者が訳していった。

第二回の特別講義では第一回の内容の可視化に努めた。すなわち、映像によってイメージを提供しながら実際の共同学習やトピック学習を理解させ、そのことによって教育目的の問い直しの深化を図った。そこで用いられたのが、

Eveline Lowe Primary School の創立 40 周年記念で作成された歴史的遺産ともいべき DVD である。Foskett 氏は、この DVD 作成の発案者であり責任者であった。時間的な制約もあり、第一回目に出た質問を考慮に入れて部分的に映像を抽出して放映し、授業実践についての解説を加えた。

なお、このような共同講義で問題になるのは時間的制約である。通訳を要するため、第一回目は定時よりも 10 分早く始めたが、質疑応答のために 10 分遅く終了する結果となった。第二回目の講義においても、授業終了後に質問が出たため休憩時間を使ったが、その後の個別の質問に対しては別途時間を取る結果となった。

表 1 授業（教育学担当）の全体像

授業日	担当者	トピック	具体的な内容	ホームワーク及び配付資料
第一講：4/11 (pm 2:00-3:20)	山崎	教育と教育学	<ul style="list-style-type: none"> ・教育という言葉の意味 ・公教育制度の成立 ・近代教育学の誕生 ・ヘルバルトとデュローイの教育思想の相違点 ・進歩主義教育の掲げる教育理念 	以下の配付資料を読了することを伝達。 ① 安東由則「臨床教育学の概念の成立—わが国における展開と系譜」新堀通也編著『臨床教育学の体系と展開』（多賀出版、2002）所収（5月2日に利用） ② 山崎洋子, Gary FOSKETT 「進歩主義教育における「子ども中心(Child-Centred Schooling)」の理論と実践」『鳴門教育大学研究紀要（教育科学編）第18号, 2003:133-147. ③ Yoko YAMASAKI, Gary FOSKETT, Study on Child-Centred Schooling and Progressive Education in Eveline Lowe Primary School: In order To Develop Integrated Studies in Japan, 溝上泰（代表）『総合的な学習の時間における教師の実践力養成のカリキュラム開発に関する研究』（平成12年度—14年度科学研究費基盤研究（A）報告書）2003:291-304. ④ Eveline Lowe Primary School: Assessing the Strengths of Eveline Lowe Primary School, 282-6. Key Issues for a 3 Dimensional Curriculum, ibid., 287 ⑤ Further Key Concept for a Child-Centred Curriculum, ibid., 287-290 ⑥ 山崎洋子「イギリスの PSHE (Personal, Social and Health Education) とその援用可能性—総合道徳教育の構想に向けて(1)」鳴門教育大学学校教育研究紀要, 20, 2005:59-67. (②と⑥は, 4月18日までに読了。②から⑥の資料は4月18日に持参)
第二講：4/18 (pm 1:50-3:30)	山崎 / フォスケット	教育目的と人間の成長・発達を考える	<ul style="list-style-type: none"> ・学校はなぜ必要か ・教育の目的は何か ・子どもの成長・発達の意味 	講演に対する感想や質問を自由に書き、次回の講義時に提出するよう伝達。
第三講：4/25 (pm 2:00-3:30)	山崎 / フォスケット	初等学校の授業から教育目的を考える	<ul style="list-style-type: none"> ・ロンドンの初等学校の DVD を視聴 (Lasting Impression: Continuity and change at Eveline Lowe Primary School) 	レポート課題を説明：人間という存在の成長・発達を視野に入れて、自ら課題を設定し論述することを伝達。

			<ul style="list-style-type: none"> ・トピック学習実施上の留意点と効果 ・質疑応答・意見交換 	
第四講：5/2 (pm 2:00-3:20)	山崎	臨床教育学とは何か	<ul style="list-style-type: none"> ・系譜の多様性 ・実践性と学際性 ・総括(課題と展望) 	5月11日までにレポートを提出することを再度、説明。
第五講：随時	山崎	課題提出	<ul style="list-style-type: none"> ・教育とは(個別質疑応答) 	

4. 「教育目的」再考へのステップーコメントよりー

では、本特別講義の意図や目的は達成されたのであろうか。そのことを明らかにするためにここで取り上げたいのは、受講生の提出したコメントである。ただ、これを基礎データとして、成果の可否を下すのは余りにも短絡的である、このような誹りが出てくることは容易に想定される。また、関係者以外のインタビュー調査などが実証性の検討に寄与することも、もちろんのことながら承知している。しかし、コメントだけでも、受講生がどのような事柄に対して批判的かつ客観的に考えたか、今後の教育課題への解決の道をどのように探っていこうとしているか、ということは見えてくるように思われる。

そこで本節では、受講生が教育目的を問い直す手がかりや契機を得たか、その必要性を自覚化したか、具体的な方法に気づいたか、といった点に留意し、彼らの言葉を「気づき」というタームに集約して取り上げることにしたい。

類型化に際しては、(1) マクロな視点からの学校・教育問題への気づき、(2) 教育観・学校観の問い直しの必要性・可能性への気づき、(3) 教育内容・教育方法の検討の必要性・可能性への気づき、そして(4) 質問を含むコメントの4つに大別する。ただし、もちろん、コメントのほとんどはいずれの内容にも言及した書き方になっている。だが、ここではあえてコメントを分割せずに掲載することにしたい。というのも、むしろその方が思考上の背景やコンテキスト、さらには心情が分かりやすいからである。それゆえ、類型化の視点は、コメント内容の力点が(1)から(4)のいずれに置かれているか、という暫定的なものに過ぎない。また、掲載に際しては、受講生の思いや受講時の雰囲気分かるように、印象的な表現もできるだけ残すことにする。なお、紙幅の関係上、抽出に際しては講義内容への言及を中心に、その代表的なものを取り上げたい。また、受講生の理解内容、疑問や思いの特徴を示すセンテンスやフレーズには一重下線を引き、教師や大人の役割への言及には二重下線を引く。その理由は、本稿で考察の対象にするという意味ではなく、集録したデータの今後の利用を考慮に入れた、いわば便宜上ゆえのことである。なお、紙幅の都合上、受講生のコメントにある段落は取り入れなかつ

た。受講生の所属については、文学研究科の場合は専攻を、臨床教育学研究科の場合は研究科のみを最後の括弧のなかに入れて記した。「・・・」は中略を意味する。また、読点はカンマに統一した。

(1) マクロな視点からの学校・教育問題への気づき

まず、受講生のコメントで大勢を占めたのが、学校教育をマクロに捉えようとする視点、すなわち社会や文化や歴史のなかで教育や学校について考えようとする姿勢である。このことを強調している代表的なコメントとしては、以下のようなものがある。

・・・イギリスの Percy Nunn の述べるところに始まり、歴史的な流れから知ることができた。教育は国家的な事業であり、社会的な要因に大きく左右される要素をはらんでいる。このことは、昨今のゆとり教育からの反動による教育改革の例を見るまでもないことである。社会を構成して生活を営んでいる以上、社会の求めに応じて身につけるべき力は異なると思われるが、今日のように、科学技術の進歩により、時間、距離が短縮された世界に生きる我々は、共通の認識をもつことで理解しあえる存在となりうると思う。それは、人を他の生物と一線を画するものとして霊性を持つということ。「人は、自らのなりたいたいものになっていく」ということである。言い換えれば、自分自身で自分を方向付ける力を持っているということである。その意味で、常に一か所にとどまり停滞するのではなく、発達していく存在として人間をとらえ、完全に知的で、個人的であり、社会性に富み、情緒的かつ精神的な知性をもつことが教育の最終目的であるという意見にはうなずけた。

(臨床教育学研究科 M1)

教育の目的には、性格形成のため・完全な生活を準備させるため・健全な身体に健全な精神を作るためという3点をあげ……。3DIである知性・社会性・精神的知性という3つの次元からこれらの目的のた

めに教育していくことは、バランスのとれた大人を育成するうえで大事な視点であると考えている。現在の日本に見られるような知識詰め込み型、試験のための学習に偏った教育では、バランスのある健全な人間は育たない。ましてや学習を好きになるのは難しい。学校がゆとり教育を打ち出すと、学力の低下が指摘され、塾通いに拍車がかかり結局、見直しせざるを得ない状況となった。日本のゆとり教育そのものに問題があったと考えられるが、しかし、日本の社会では、学歴社会が根強くある。教育の目的を明確に持ちながら、従来の学校教育をソフトとハード面の両面から抜本的に変えていく必要性がある。社会全体の価値観の変革が必要である。では、理想の教育を実現にするためには具体的にどう取り組んでいけばよいのだろうか？また、現実に多くの教育問題を抱えていく教育現場において、そのギャップをどう埋めていけばよいのだろうか？ナンが提唱する「一人一人の個別カリキュラム」などは、教師力が大きく問われることになる。その教師力はどうしてつけていくのか？社会から見て、学校教育に何が望まれているのか。学校から社会につなげるためには、また社会の中で生きていくためには何が必要なのか。現状を踏まえた対策を考えていかなければならない。(臨床教育学研究科 M1)

・・・3DI は、人格をつくる要素でもあり、人間が生きていく上で重要なものである・・・つまり、それは、教育基本法のいう「人格の完成」や、文部科学省のいう「生きる力」にとって重要な要素である・・・3DI や人格、「生きる力」といったものは、学問中心の教育で育むことは難しい。というのも、単に知識を覚えるだけでは人間の内面は成長しないからである。しかし、現在の日本の教育は、学問中心の教育が重視される傾向にあり、イギリスにおいても、学問中心の教育が推進されている。なぜ、日本やイギリスでは、学問中心の教育が重視されようとしているのだろうか。この問いの答えは一つではないし、政治や経済の問題が複雑に関係していると思われる。一人ひとりの人間が知性に導かれた思考をもつことは、政治や経済を司る人々にとって喜ばしくないことである・・・また、人ひとりがそれぞれの思考をもつということは、お互いを尊重する社会的な知性、精神的な知性が高度に要求される・・・先生の主張は、これからの社会において重要な提案であるように思われる。そのため、先生の目指す 3DI について、その育成がどのような方法で実現可能であるのか、または、それらがそもそも必要であるのかという根本的な問い・・・考えてい

く・・・。(教育学専攻 M1)

また、各学問の立場から学校教育を捉え直そうとする姿勢も見られ、なかには教師論に帰着させた論述も存在する。

私は臨床心理学を学ぶ目的で大学院に進学したが、心理学以外の学問も広く教養を身に付けたいという気持ちも持ち合わせており、・・・特に言及したいのは、教育における 3 つの aim すなわち目的についてである。人格の形成、完璧な生活のための準備、健全な体に健全な精神を宿すこと、以上の 3 点が挙げられていた。この目的が達成されず破綻することは健康でない、良くない状態に陥ることを意味し、それは心を病むことにつながってしまうように思う。つまり、3 つの aim は臨床の面から考えても理想的な事柄なのではないだろうか・・・また・・・「1 つの価値観で全てを支配することはできない」という言葉は、教育学や心理学のみならず、人間が陥りやすい人間の欠点であり、どんな学問にも精通する大切なことであると感じた。一見当たり前のことだからこそ陥りそうな事実であるように思う。人間がより良く生きることについて、普段は心理学という領域で考えているのだが今回は教育学という新たな視点で深く考えることができてとても為になった。(臨床心理学専攻 M1)

“Three aims of education ; To form character, To prepare for complete living, To produce a sound mind in a sound body.” この文から、教育とは福祉的な考えと通じていると改めて感じた。子どもは自分自身であることができ、個人の自由な発想、意見をもつことが自然である。学校でのさまざまな経験や活動から、子どもたちが生きることを学び、学ぶことの楽しさを学ぶことは、想像力、創造力に富む、よりよい人生、幸福、鮮やかで生き生きとした生活を歩むことにつながると思う。一人ひとりの子どもの成長と発達を助けるのが援助者としての教師の役割だとすると、教師自身が子どものように活動的で好奇心にあふれ、子どものニーズに敏感であり、学ぶことに常に意欲的でありつづけなければいけないように思う。(臨床教育研究学科 M1)

今回の講義では、インターネット社会の新しい学習方法とはなにかという問いが与えられた。その中で、「性格形成」、「完全な生活の準備」、「健全な身体における健全な精神を作ること」は教えたり学んだりできるものなのかということも問題提起された。そのことについて、アメリカのポジティブ心理学とい

分野で「character education」というものを目にしたことがあるのを思い出した。ある期間にある徳目が与えられて子どもたちがその獲得を目指すというものである。他者との関係性の中で自分自身を方向付けることのできる知的で社会的で精神的な人間を目指すことにおいて共通する部分があるように思った。インターネット社会という新しい社会だからこそ教育の目的としてアナログ時代の道徳的品性という倫理がより強化される必要があるのではないだろうか。また、その実現には優れた教師の存在が欠かせないと考える。自主性を尊重しつつ生徒とともに考えたりヒントを与えたりすることのできる大人がいてこそ子どもは学んでいくことができる・・・。(臨床心理学専攻 M1)

(2) 教育観・学校観の問い直しの必要性・可能性への気づき

次に多く見られたのが、教育や学校への根源的な問いである。もちろん、全てのコメントは、公教育を念頭においており、そこには教育制度や学校組織の矛盾や問題点への言及が見られる。また、なかには日頃の疑念や思いを解く方向性が示されたために、わが意を得たりとするような力強い文言もある。同時に、そうしたコメントには、教育や学校に関わる大人や教師の役割の重みへの気づきや再確認の姿勢を示す言葉も散在している。

はじめに、・・・貴重な講演を聴講することができ無量でした。教育には何が必要なのか、私にとっても長年の疑問であり課題でした。ただただ教育の技法や方法論が先行している現在に、教育の根底とも思われる 3DI のお話を聞いて足から見つめなおす必要性を感じました。教育者として、生徒に何を学んでほしいかという思いはもとより、教育の場を通してどのような人間になってほしいのかを念頭に置き生徒たちと向き合っていく思いを強く持つことができました。(臨床心理学専攻 M1)

さまざまな教育について学んでいる中で、「本当に学校は必要か」という問いにたどり着くことは、私にはなかった。今回改めてその問いに向き合うことで、教育の本当の目的と、将来、私たちのように教育現場に立つ者が子どもたちのために果たす役割について考えることができた。・・・教育の3つの目的、子どもたちの性格の形成、子どもたちにとって完全な生活を準備すること、健全な身体、精神をつくることは、知識を詰め込む上辺だけの教育ではなく、子どもたちの人格形成、人間形成のための、まさに全人的教育のように思えた。日本の教育をみつめなお

してみると、まだまだ知識を詰め込む、試験のための教育という傾向が強い・・・再度振り返り、・・・主体的に学ばせるための教育、・・・私たちが子どもたちのために何をしてやれるかを今一度考え直してみたい。(教育学専攻 M2)

私にとってこの講演の内容はすごく難しかった。けれども、この講演を聴いて、改めて「学校とは何か?」について考えさせられた。ゆとり教育がおこなわれるようになってから、日本の学校における役割が大きく変わったと私は思う。ゆとり教育については学力低下など、様々な批判もあるが、それまでは「学校＝勉強」といった感じだったが、ゆとり教育がおこなわれるようになってからは、人格、人間の内的な部分の成長に力が入れていると思う。しかし、それが本当に学校の役割なのかと聞かれると、必ずしもそうであるとはいえない。現代社会において、学校はもちろん、家庭など子どもを取り巻く環境がめまぐるしく変化し、不登校や学級崩壊、非行、犯罪など様々な問題がおきているため、学校が勉強以外の役割を多く担わなければならないのかもしれない。日本において、教育をもっと人間らしくすることはいいことだと思うし、まさに大人が子供達に知識を伝達するといった人間味あふれる教育をもっとおこなわれるべきである・・・。(臨床心理学専攻 M1)

学校に求められるものは、子どもたちに「学問的能力」に加え、「社会的感情的知力」「創造力」を養うことだと再認識した。学力重視社会の今日、多くの学校では、学力重視の授業やテストが日々実施され、他の二点が軽視されているか、その方法が模索中であるというのが現状だ。学校だけの問題にとどまらず、このような社会から、また制度化され強いられる「今の総合学習」からでは、学力以外の力を養っていくことは困難だと思う。・・・(臨床教育学研究科 M1)

自分の興味、関心のある学習内容に自分のペースで取り組むことと、私が今まで抱いていた学校のイメージ【と】は相反するものであった。義務教育課程においては、決められた学習内容を一定の期間内に終了させることが求められ、その評価基準も一定である。そのため、子どもの主体性を伸ばすことを目標に掲げる学校はあっても名ばかりであると感じていた。・・・(臨床心理学専攻 1年) ([]:引用者)

以上のコメントでは、「本当に学校は必要か」「改めて学

校とは」と問い直しを迫られた時の気持ちが様々な言葉を用いて表現されている。いずれからもその衝撃の大きさをえに、受講生の内面世界の葛藤の様子が窺われよう。また、学校のイメージが変わったことを示す文言とともに、学校の教育目標が実態とかけ離れていると吐露したものや現在の総合学習の状態への批判もある。ただ、いずれのコメントからも、教育観や学校観が揺るがされている様子が窺われる。

(3) 教育内容・教育方法の検討の必要性・可能性への気づき

第三に着目したいのは、学校教育への批判や反省とともに教育内容や教育方法など、教育の具体相について言及しているコメントである。ただ、これらのコメントが対象としている教育事象の幅は実に広い。たとえば、教育哲学がテーマとするような教育理念から教師論に属するような教師の力量形成、さらには自らの自己形成の省察までの文言が見られ、広い範囲に亘っている。とはいえ、教育改革への道を、教育の内容や方法に注目するかたちで述べているという点で、抽出に値するコメントである。

・・・イヴラインロウ小学校が目標とする教育方針は、私が実際に受けてきた教育とは随分異なるように思えた。義務教育課程では一斉授業が主であったので、特に学習内容や状況によって教育方法が異なる点が印象的であった。そのような柔軟性によって、個人のもつ能力が最大限に引き出される可能性を持つのであろう。イヴラインロウ小学校の実践から学ぶものは多いが、ただ単に子どもに自由を与えるという意味に捉えず、念頭に教育目標を持ち子どもたちが自由に選べる選択肢を提供する力量が必要であると感じた。(臨床心理学専攻1年)

・・・注目した点は、子ども中心教育の「自由な子ども」という概念のジレンマである。自由は、何もしないことを許しかねない。もちろん、ここでいう「自由な子ども」とは、子どもは学ぶことに対して積極的であり、子どもに自主性があった上での自由である。従って、全権限のすべてを子どもに委ねるのではなく、ある程度までは教師が子どもにテーマを与えるべきである。自由は、教師の放任主義を助長しかねない。実際に、子どもの自由という意味を履き違えた失敗例も論文の中で挙げられている。例えば近年、日本においてもゆとり教育についてたびたび採り上げられている。戦後、多元的知性のIQ(本能的知性)ばかりが重要視されてきた日本にとって、ゆとり教育の試みは大きな教育改革であったといえるだろう。しかし一方で、ゆとり教育は、学力の低

下を助長する結果となった。つまり、多元的知性でのEQ(感情的知性)ばかりが強調される結果となったのである。特にこのようなゆとり教育の中で、「平等」を大きく掲げすぎているように感じる。私は、「平等」は子どもの想像力を阻む危険性があると感じている。なぜなら子どもたちは「平等」というものに縛られ、枠を越えることができないからである。そのため、個性を出せずに、「平等」という枠の中に納まってしまっているのである。・・・IQ・EQ・SQは、どれか一つに偏りすぎることなく、適度に満遍なく取り入れるべきである。・・・教師がしっかり自由の概念について考えてみる必要があるのかもしれない。(臨床心理学専攻M1)

・・・日本の教育行政は結論を急ぎすぎているのではないかということである。子どもを中心に据えた柔軟な学習活動を目指して、総合的な学習の時間が導入されたが、それはすぐに削減され、再び知識重視の思考に走りつつある。しかし、たった数年行って結果が出ないからと言って闇雲に方向転換をしたところで、教師や子どもたちは戸惑うばかりで何の成果も得られていない・・・。長い目で先を見通して、現場が十分に対応できる余裕をもたせることが、重要ではないだろうか。(教育学専攻M1)

日本は豊かな学力を目指すことで、「答え」にこだわり過ぎていたと感じた。私自身「答え」にこだわり過ぎて、答えを求めて自分の意見を言えず一歩引いて待っていた。そのように考えてしまうのも、全体に合わせて行動すること、点数評価、受身の授業などの影響で自分を出すことの恐れがあったと思う。幼いときに自分の意見を言うことができれば、それに考えてくれる人がいれば、自分は何か変わったのではと感じる。自分という個性を出すための方法として、話し合いや討論をする機会が重要だと考えた。また、討論をする上で社会の中に多くの「答え」があっただと、受け入れることが必要・・・。(教育学専攻M1)

(4) 質問を含むコメント

最後に取り上げたいのは、質問を中心にして書かれたコメントである。実は、本特別講義では、講演後に受講生から質問が出たが、全ての受講者からではなかった。英語で質問することが苦手な者は、このようにコメントのなかで質問しており、内容的にも興味深いものである。

・・・英語が不得手な学生に対して、Foskett 先生がわかりやすく丁寧に話そうとされていたご様子に大

変感銘を受けた。・・・先生は日本の禅にも造詣が深いとのことであったが、それは Spiritual Intelligence に何か関連することではなかろうかと想像し、時間の関係上無理であったがもう少しお話を伺いたいと感じた。インターネットのスピード感と、禅の静的なイメージは、互いに相反するものであるが、その両方の側面を先生がどのように考えておられるのかがとても気になった。私自身も今後の学習の中で考えていきたいと思う（臨床教育学研究科 M1）

・・・また、イギリスではどこの学校に行くかは親が決めることができると言っていたが、それは親の教育への関心度や経済力などで子どもの教育環境が異なり、子どもの成長や発達の可能性は親次第ということにならないのか疑問に思いました。日本では今のところ、義務教育の公立学校に関しては学区が決まっているが、「お受験」をする子どももいれば、親の経済的理由で進学できない子どももいると言った面では、親次第で教育環境が異なるという現実があり、格差社会が広がっているなかで、これからますます親次第で子どもの教育環境が左右されることが懸念されます。多元的知性の成長・発達の機会をそれぞれの子どものにあった方法で行うこと、そのことがすべての子どもに保障される教育を実現するにはどうすればいいのか、今後の講義のなかで自分なりに考察できればと思います。（臨床教育学研究科 M1）

以上の質問はシビアなものであり、どのような答えが返ってくるか興味深いところである。また、当日の質問には、「理想としては全人的な発達が掲げられているが、現実には試験中心の教育観である」、「知識以外の能力を教育の対象とすると、教師の内面に葛藤が生じるのではないか」というものがあつた。Foskett 氏は、前者のコメントに対して同意し、近年イギリス政府もその傾向を強めていると述べた。とはいえ、そうしたなかで、世界を見通した賢明な判断が求められると応答し、そうであるがゆえに、教育実践者の声が重要であると付け加えた。後者に対して同意し、教師間の連携の重要性を指摘した。そして、その意味で中国の近年の教育改革は興味深いと結んだ。いずれも、議論の継続を要する問いである。

5. 「気づきと問い直し」の展望—むすびに代えて—

以上の受講生のコメントを概観すると、まず了解されることは、研究上のスタンスや立場が明確に現れていることである。が、それだけでなく、彼らの考えが根底から揺るがされざるを得ないほどの刺激的な内容であったこともわかる。それを受けて、彼らは、ステレオタイプ的な教育観

の変革を志向しつつ、心身共に健全な「全人的な人間」の形成・育成の重要性を再確認している。もちろん、こうした目的はだれもが知っている教育原理であろう。しかし、教育現場では往々にして、この原理への配慮が欠如しがちである。そこで、さらにやっかいなのが、人間の自由の問題である。受講生のなかには、子どもに保障されている「自由」のジレンマを認識しつつ、人間の十全の発達に向けて一歩踏み出そうとする気概や覚悟を表明している者もいる。このことは、推察するに、受講生の専門領域が人間を対象に据えた「人間による人間のため」の学問であることとも密接に関連している。

さらに、瞠目に値するのは、全ての受講生が日本の教育を実にしっかりと「省察」している点である。そして、そこに通底しているのは、今後の教育をより良くしていこうとする積極かつ真剣な姿勢である。なかには、「教育学には興味がなかった者」、「教育学に触れたことがなかった者」も存在する。しかし、それにもかかわらず、彼らは一様に、教育についての問題意識を強め、より良い方向へと改善するための探究の姿勢の重要性について開陳しているのである。しかも、興味深いのは、受講生全員が、イギリスの教育実践家の見解を単に受容するのではなく、日本という国独自の文化や歴史を踏まえて、教育改革について真摯に考えることが重要である、と声明していることである。ここに「事象・現象の違い・差異性」に向き合う態度、すなわち日本という国の独自性を堅持することの重要性への真摯かつ前向きな態度が見られ、教育を捉える自覚の契機が窺われる。

ただ留意すべきは、特別講義の意義は、そもそも、一時的な刺激の提供にではなく、根源的な問いに向き合う契機を生み自覚を惹起することに存する、ということである。換言すれば、特別講義の有効性は、意識に残り続ける内容、想起される内容に依拠するのである。その可否については別途、検討する必要がある。ただ、一定の手応えを得た、ということは付言しておきたい。すなわち、教育目的の再考に向けて、何らかのステップを踏み出そうとする自覚が受講生の内面に生まれた、と解し得る叙述が見られたことである。もちろん、その自覚がどの程度持続するかは、こうした教育機会を計画的に提供することに関わる。受講生の自覚の継続と思考の深化を期して待ちたいところである。

最後になったが、本稿の論述上の限界あるいは禁欲的態度について述べておきたい。本稿では、分析や考察を中心に据えるのではなく、授業構想とその実際、そして受講生の思いや考えを報告することに徹した。それゆえ、本稿はコメントの質的検討には立ち入っていない。また、ディスコース分析の手法も用いていない。これは本稿の限界である。が、他方で、この点は授業者＝考察者（分析者）であるということへの筆者の禁欲的態度の表れでもある。この

ことをいかに考えるかは、判断の分かれるところであろう。また、同時にそれは本実践研究ノートのレズンデートルにも関わる。ジレンマをとまなうこの課題に関しては、今後、議論する必要がある、また質的研究のディシプリンを有する研究者との共同研究の成果が待たれるところである。

質的分析および教育実践研究のあり方の検討については、他の機会に譲ることにしたい。

謝辞

本授業では、授業者として初めて経験するような、興味深い受講者の反応が随所で見られた。それゆえ、筆者にとっても印象深い刺激的な授業の一つであった、ということが出来る。ただ他方では、受講者の反応や理解度を探りながら、まさに暗中模索で進めた授業であった、と表現することもできよう。

それゆえ、本授業が教育目的の問い直しや教育の再考を促すことに成功したとするならば、それは特別講義における共同講演者のご尽力によるものである。氏に改めて衷心より謝意を申し述べたい。I would like to show my gratitude to Mr. Gary Foskett for his moral support and his warm encouragement for me and our research students in

the special lectures.

また、当日の準備に際しては、教育学専攻の M1 院生の須佐佳代、辻田めぐみ、原田朋香、教育学専攻 M2 院生の秋宗佑紀、さらに加えて臨床教育学研究科 D1 院生の中道莉央が協力した。彼らの協力がなければこの特別講義はスムーズに進まなかったであろう。関係者によるチームワークがうまく機能した授業の一事例となった。院生諸氏にも改めて感謝したい。またさらに、第一回目の特別講義には、近年しばしばイギリスを訪問してカリキュラム改革やテキスト比較の研究を進めている本学講師の大津尚志氏も参加され、貴重な質問をいただいた。大津氏にも厚く御礼申し上げたい。

準備に相当な時間を要すること、受講生の充足感が見通せないこと、こうしたことから計画と実施にはある種の勇気と覚悟が必要であるが、このような機会を今後も継続的に計画することは有効であろう。

なお、特別講義の講義内容については、別途、本『教育学研究論集』(75-81 頁)に 'Teaching, the Aims of Education and a Learning Revolution' というタイトルを付して集録されているので参照されたい。

<授業風景>



(Taken by Tomoka Harada)



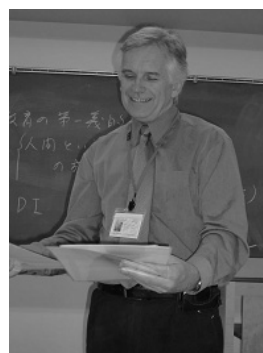
(Taken by Gary Foskett)



(Taken by Gary Foskett)



(Taken by Tomoka Harada)



(Taken by Tomoka Harada)

—注—

- 1 本科目の新設は、臨床教育学研究科博士後期課程に教育学と臨床心理学の分野が加わったこととも連動している。
- 2 成績評価は、各授業担当者から出てきた素点を総計し、統合的に評価するという形式を採用した。
- 3 なお、Eveline Lowe primary School の表記については、筆者の研究過程で、イヴライン・ロウ小学校、イヴライン・ロウ初等学校、イヴェーリン・ロウ初等学校、というように変化している。筆者の直近の訳書『教育史から学ぶ—イギリス教育改革からの提言—』（注4参照）では、イヴェーリン・ロウ初等学校としたが、本稿では、英語表記を用いることにする。
- 4 筆者は、2002年2月より、当該校を教育実践研究のフィールドとし、継続的に研究を進めてきた。その一連の研究成果は、本講義時の配付資料②③⑥及び注6に挙げた論考に加えて、次のようなものがある。
山崎洋子「イギリス公教育におけるイヴラインロウ小学校の先駆性—全人的発達の可能性を求めた歴史と現在—」、鳴門教育大学『鳴門教育大学学校教育実践センター紀要』第18号、2003、pp. 59-70。 Gary Foskett 講演、山崎洋子訳「総合学習と教科教育にもとづく子どもの成長・発達—ロンドンの公立小学校の実践報告 (The Growth and Development of Children through the integrated studies and School Subjects- A Public Primary School in London)」平成12年度 平成14年度科学研究費補助金基盤研究A(1)研究成果報告書（研究代表・溝上泰）『総合的な学習の時間における教師の実践力養成のカリキュラム開発に関する研究』2003、pp. 263-281。
また、イギリスの進歩主義教育の思想及び歴史については、次の二冊の訳書を参照されたい。
ピーター・カニンガム著、山崎洋子・木村裕三監訳『イギリスの初等学校カリキュラム改革—進歩主義的理想の普及—』（Peter Cunningham: *Curriculum Change in the Primary School since 1945*）（つなん出版、2006）、リチャード・オールドリッチ著、山崎洋子・木村裕三監訳『教育史から学ぶ—イギリス教育改革からの提言—』（Richard Aldrich: *Lessons from History of Education*）（知泉書館、2009）
- 5 本科研は、平成19-21年度、科学研究基盤研究(C)（課題番号19530734）、研究代表者・山崎洋子の「イギリス新教育運動における教師の『行為コード』と専門職化に関する教育思想史的研究」である。氏の来日期間は平成21年3月29日から4月25日、科研研究招聘期間は、同4月1日から4月25日である。本講義は、科研業務外の日を選んで計画されたものである。また、講義に際して、研究協力者としての氏の研究成果の一端を紹介することも視野に入れた。
- 6 筆者は前任校時代の、2001年12月以降、年に数回同校を訪問し調査を続けてきた。また、三年間に亘って、日本人の現職院生らを引率して訪問し、現職院生による対面式授業を同校の子どもたちに実施したり、校長や教頭を招聘した講演会や研究プロジェクト等に取り組んできた。さらにまた、2003年度から2005年度まで、同校の教育実践者や日本の現職教員院生らとともに教員志望の教育学部3年生に半期三年間、同校の授業観察やイギリスの子どもたちとの交流会を実施してきた。これはテレビ会議システムを利用したプロジェクト型演習授業であった。日本側スタッフとしては筆者以外に、情報環境、英語教育、国語教育、小学校カリキュラムの各研究者が、イギリス側スタッフとしては校長のFoskett氏以外に、情報技術者、教頭、クラス担任、日本人通訳らが協力・参画した。その財源としては、学内プロジェクト予算や時限付き科研費などを用いた。
なおジョイント・レッスンやイギリスの授業観察については、次のような論考がある。山崎洋子「Videoconferencingによるイヴラインロウ小学校の授業観察の試み—意味世界の<learning>への気づきを求めて—」鳴門教育大学『鳴門教育大学情報教育ジャーナル』2号、2005、pp. 65-75。 Yoko YAMASAKI, The New Possibility of Teacher Education using Videoconferencing System; E-learning and Pedagogy for the Technological Society, 鳴門教育大学『鳴門教育大学情報教育ジャーナル』4号、2007、pp. 81-90。

（受理日、2010年1月20日）